

浄土

1985-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉者（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和六十年三月二十五日印刷 昭和六十年四月一日発行

第五十一卷

四月号



四月の秀句

降りつづく弥生半ばとなりにけり
夜桜や遠ざかり来て顧る
窓前の松一曲す春の海

高浜 虚子
富安 風生
水原秋桜子



四月号



仏身の高さ六十万億那由他恒河沙
由旬なり。眉間の白毫は右に旋り
て婉転（おんでん）せり、五須弥山
の如し。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

花まつりの意義……………松 島 定 宣……(2)

——灌仏に自らの誕生を念ず——

御忌会のころ……………村 上 博 了……(7)

み仏とともに = 1 =

——うるわしのわが故郷——……………安 居 香 山 ……(18)

《世相評談》

内の目、外の目……………丹 羽 演 誠……(13)

——離婚も人生の再出発——

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(一)……………木 下 隆 一……(26)

＜読者のページ＞

合掌するところ……………藤 村 正 雄……(23)

◎現代詩コーナー 四月の花……………坂 田 文 三……(32)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第10回

江南の残月 (一)

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(話)

花まつりの意義

—灌仏に自らの誕生を念ず—

(法)

○花咲爺さんお釈迦さま

花まつりの季節になると、なつかしく思い出すことがある。

それは昭和三十四年頃、私は伊豆の南端の病院で、すでに十年余り療養につとめながら、未だいつ退院できるともわからぬ病む身をベットに横たえ、終日天井をみて過していた。

「ただ一筋に退院して働く日のために療養し、その日にそなえて勉強するのみの生活が、果して正

まつ
しま じょう
せん
松 島 定 宣

しい生き方であろうか。日々は全治退院の爲にあり、現在はその過程に過ぎないような生き方でいいのか。明日死ぬという時、満足して死ぬのか」という疑問がおこり、悩んだ。

幸い一夜賢者経等の教えに導びかれ、「私の生きてゐるのは現在只今なのだ。この只今に全力をあげて生き、今ある生命の尊さを自覚した積極的な生き方をしなければならぬ」と改めて気づかされた。

爾来、その時、その場、その病状において、出来ること、なさねばならぬことは何でも進んで

やる、頼まれたことは全て引受けてやってみる、という心の大転換をした。徐々に活動範囲が拡がり、様々な世話、奉仕活動を始めた。

その中の一つに、仏教サークル「ほだいじゅ会」の創設運営があった。仏教書の回覧、定例の法話と懇談の会合、機関誌の隔月発行、信仰身上相談等が主な活動で、その中で一番大きなものが毎年の花まつりであった。

花御堂は回復期の会員の手で作られた。飾る花は、各病棟の重症者もまじえた女子患者有志が手分けして作り、五百ばかりの桜紙の造花が集まった。前日元気で動ける会員によって美事に飾りつけられた花御堂は、四月八日の当日は、病院の中央食堂の前に安置され、出入りの職員、看護婦、患者の皆さんが甘茶を灌いで祝尊の誕生を祝い、お参りした。

その日、午前の安静時間があけると、元氣なほだいじゅ会会員にさざげられて花御堂のお練りである。各病棟を訪ねる。外に出ることの許されない重症者のベッドの傍までゆき、寝たままで灌仏

してもらい。希望者には甘茶を接待する。「お釈迦さまが私のベッドまで来て下さった」と大へんなよろこびであった。

近くの村の有縁の方々の協力呼びかけ、温室造りの菊、スイトビー、フリージア、金魚草等が沢山寄贈された。それを小さな花束にして重症患者、手術患者へプレゼントして歩いた。又、看護婦さんや手芸サークルの協力を得て、その手芸作品を、六十五歳以上の高齢者に花まつりプレゼントとして贈ったりした。不思議と誰もがよるこんで快く協力し援助して下さった。

このように病院内で初めて花まつり行事を行ったのは、「花まつり運動」を創始された安藤嶺丸師の「花咲爺さんお釈迦さま」という提唱に導かれてのことであった。花咲爺さんの話はインドの童話で、枯木のように、生きる自信を失った心わびしい者に、いつもにこやかな顔で、教えの灰をまいて、枯木に花を咲かせるが如く、悲しみや失意の心に生き生きと花を咲かせたもうたお釈迦さまを表象した話である。私も花を咲かせて頂い

た。多くの患者も又、心に明るい花を頂いたことである。

当時は、患者の大多数は幼い頃の花まつりや甘茶の思い出があり、その為に大へんに喜ばれ、感謝された行事であった。今では、花まつりはお釈迦さまのお誕生を祝うものであることすら知らぬ子供が、増えているのではなからうか。残念なことである。

全日仏や各宗の中樞や各組織が中心になって、今一度、花咲爺さんお釈迦さまの花まつり運動を展開出来ないものであろうか。生活に疲れ、病にひしがれ、老いに孤独をかみしめる人々の心に、花を咲かせる花まつりが展開出来ないものであろうか。

○人生第二の誕生

又、この灌仏会の肝要は、夫々が真の人間的身を促され、自己の新生、第二の誕生の尊さを教えられるところにある。前述の病院においては、

甘茶をかけて、み仏の誕生を祝い感謝しながら、実は自分自身の産湯のつもりで自己の新生脱皮を祈ろうと呼びかけた。

この第二の誕生という意義を考えてみたい。

釈尊は今から二千五百年前即ち西紀前四六三年（中村元博士説、他にセイロンでは五六三年とする）ヒマラヤの麓、釈迦族の国の王族の一人として、この世に現れたもうた。ご生涯は八十年であったが、稀有の完成せる大人格となりたまい、親しく接した弟子、信者達に強い感化を及ぼされたのみならず、アジアや世界の人々から人類の教師として仰がれている。

このような素晴らしい大人格が、数十年という短い期間に完成されるとは、到底想像できない。ということから、仏となられる前は菩薩として過去無数の生涯の間に、限らない自己犠牲によって功德を積み（ジャータカ物語・本生譚が、この釈尊の自己犠牲の話である）、その結果、兜率天^{トスソク}にのぼり、時期を見て苦の衆生を救わんが為に人界に生れ出て、仏となりたもうたと考え、信じてきたのであ

る。「託胎」といって、この菩薩の生を託せられたのが釈迦族の浄飯王の妃摩耶夫人である。兜率天から下って母の胎内に入れ、それも古くからのしきたりによって六牙の白象となって、母の右脇から入胎された。摩耶夫人はその時静かに眠ったまま、この出来ごとを夢に見られた、と仏伝は筆をそろえている。

これは何を意味しているのであろうか。人間の生命の尊さを想う時、人の生命は単に父母の愛欲の結果として、乃至願望によって生れたとか、出来た、というものではない。大いなる生命の世界、即ち仏の世界から、夫々に尊い使命と意義をもって、父母を縁としてこの世に生れしめられたものである、ということの意味する。このようにうけとり、父母がその子を、単にわが子、わが所有の子と思うは大いなる誤りであり、み仏より授けられた子、預けられたる「仏の子」として拝み育てよというのが仏教の子育て観である。花まつりに当り、お釈迦さまの生れの尊さを思うと共に、我等の生れも又尊いことを思わねばならぬ。

託胎して十カ月たつと、摩耶夫人は菩薩の誕生の時がきたことを知り、王の許しを得て生家のコーリー城へとゆく途中、釈迦族の遊園なるルンビニーの花園に立寄られた。遙かに遠く白雪を頂くヒマラヤの連山が仰がれ、樹木には美しい花が咲き誇っていた。多くの侍女にかしずかれた摩耶夫人が快い歩みをはこんで、たわわに花咲く無憂樹の一枝にすがられた時、菩薩は母の右脇から安らかに誕生された。まことに輝くような御子であった。

生れるやそのまま四方に七歩を運んで、「天が上、天が下、唯我最も尊きものとなり、世に満つる苦を除くであろう」と宣言された、と仏伝は記している。ところで、これを如何に領解したらよいだろうか。

もとより生れてすぐの子が、歩いたり物を言う訳はない。当時のインドの伝説に従って、クシャトリア(王族)の生れであることを右脇より生れたと表現しているように、七歩あるき、唯我独尊と宣言されたというのは、この誕生の時点に、一生

の大事を引き寄せて、六道（地獄、餓鬼等）の迷いの境涯を越えて、最尊の覚者、仏となりたまひ、衆生を救うことを表しているのである。そして私共にも、同じように生命の尊さのあることを説いているのである。

お釈迦さまが六年の苦行の後、三十五歳で成道し仏となられた時、「ああ何という不思議であらう、草木山川ものみな、仏のいのちを持っている」と感嘆なさったと伝えられているのは、正にこの誕生の時の「天にも地にも欠けがえのない尊い生命をもって生れている」と宣言をなさって、私共に自覚をうながしておられるのと、同一のことを表しているのである。

その後、虚空から竜王が香水香湯の二流をもつてこの菩薩の御身を洗い、大地は一斉に歓喜の声をあげたという。この伝説に従って、私共は、花御堂の中の右手は上、左手は下を指している姿の誕生仏に甘茶を灌いでみ仏の誕生を祝うのである。この時次の二つの心得が大切である。

(一) 先ず釈尊がこの世に出でましたお蔭でその甚

深のみ教えがあり、如何なる深き縁ありてか、この世においてその仏の教えに会えたことへの感謝と喜びをもって礼拝する。

(二) 花御堂の花が象徴する仏の生命、そして手をあげて堂々と誕生仏が宣言して下さっているように、私もみ仏と同じ最尊のいのちを頂いて生れておることを自覚させて頂く。

このことにめざめて真に人間として生れ出る。第二の誕生をするのだ、という自らの産湯をする心持で、甘茶を灌ぎ、供養したいものである。

四月七日は元祖さまの降誕会である。法然上人が一生をかけてお導びきを下さった念仏を信じ、念仏に全てをうち任せて生きる時、み仏の大いなる生命に生かされて生きる。即ち仏のみのちに生きる第二の誕生、真人生があらわれる。念仏を申しながら灌仏することである。

私はこのように花まつりを領解して、いよいよ枯木の如くなりゆく人の世に、花の如く輝く日々を、よろこびの花を咲かせて頂こうと思っている。

(法)

(話)

御忌会のころ



御忌とは、天皇の忌日の敬称で一般人には用いられない。

浄土宗で宗祖大師法然上人忌を、御忌と申上げるは、大永四年（一二二四）正月十八日、後柏原天皇（即位廿五年目）、知恩院宗祖忌に、御参詣あり、住職知恩院二十五世超譽存牛上人に、毎年孟春一七日間昼夜に至り祖忌

むら
かみ
はく
りょう
村
上
博
了

（茨城県境町専修寺住職）

を厳修せよと詔を賜って以来、聖旨を体して「御忌」と言う、教界無双の榮譽であり他宗にその例がない。教界で、御忌と言わば浄土宗祖念仏元祖円光・和順大師法然上人忌以外にない。わが宗では総大本山はじめ一宗寺院で、四月に御忌を奉修するから俗に四月を御忌月とも云う。

天皇は父君後土御門天皇同様御念仏信仰厚く毎月十六日は、禁中で百万遍念仏会が厳修されていた。特に大永三年四月十八日知恩院と百山知恩寺と総本山位に付き争論あり、知恩院が総本山と決定している。従って念仏信仰に厚い天皇の御参詣となり、詔に「知恩教院は淨宗創業道場祖師入寂靈跡」「遺教を海内に布き、属利国中に編し」と御言葉を拝し、いささかもその末流は本源を忘るべからずと針をさされている。

四月と云えば酷寒を凌いで、ようやく迎えた待望の陽春。而も水ぬるみ、大地には緑が点在し、樹木に百花競い、蝶舞い、鳥歌い、衣類軽く春うららとあつては、人々の心もうき立つ時である。

彼岸に人生のクシメを知り、仏性に目ざめ希望が大きく育つ時、森羅万象に劣らず生き生きとした希望実現をはかりたい。その糧は報恩感謝の御忌会に参加し、聖旨に応えるべきでないか。

我々が祖山に参詣することは、生れながら持つてゐる仏性、やさしさ、大らかさ、おかげさまの心を培う好機である。

さてこの御忌の前夜祭として、七日は、宗祖大師法然上人生誕日、翌八日は大聖釈尊の生誕日と続いている。偶然かも知れない。しかし教界無双の大哲人の生誕日が、前後日であつたり、花時であることは誠に偶然であらうか。

法然上人は、崇徳天皇長承二年四月七日美作国稲岡庄に生れた。そして大聖釈尊は、八日印度マカダ国の花園で生れた。共に春花はたけなわである。

前者の上人生誕日七日の七の数は經典隨所に見られる。特に淨土三部經の一つ阿彌陀經には若七日、七重宝池、七重欄楯等と西方極樂世界に縁が深い。世俗にも葬儀後の忌日等に用いられて仏縁が顯著である。

釈尊生誕八日の八の字は末広で縁起が良い。釈尊誕生日は灌仏会・竜生会と名付けけ

茶をかけて祝ってきたが、その名称が近代的ではない。社会の人々には判りにくい名称であった。

教界大先覚者渡辺海旭先生（筆者の恩師）が、明治三十三年五月ドイツに留学され、在独十一カ年後明治四十四年八月東京芝中学校長に就任以後、教界学界に大活動されたことは周知のところである。特にわが国では、欧米先進国に比し男女少年団の結成交友互研の機会がないことを知り、少年大会を各地に開いて少年間の交友を図った。而して四月八日の灌仏会を「花まつり」と命名し、青少年団の一行事とする。現在花まつりと云えば、大聖釈尊の生誕まつりとなり、毎年各地で盛行され青少年の心の糧（かて）となり、まことにほほえましい。

花まつりが楽しい花の季節、新入学時就職初出勤月であり、法然上人と釈尊誕生日が七日、八日とつづき、共におまつりであることは、両巨人がともに社会生活の巨花であり、

人類永遠の光明であって有難い。又信仰教義上からも弥陀の大慈悲は、釈尊出世の本懐、凡夫往生の称名念仏にあり、浄土宗の開宗となる。両大哲人の関係は、如来の本願称名念仏を通し如来の聖縁であらう。

法然上人幼名を勢至丸と云う。上人九歳の保延七年春（上人生家漆間家は稲岡庄の豪族であり、彼岸には一族漆間家に集って、先祖まつりのご馳走が習慣のその夜）時国家の油断を狙った四キロ程先の稲岡庄預り弓削（ゆげ）城主明石源内定明の夜襲をうけた。その時、勢至丸と母はただならぬ物音と殺気に気付き、急ぎ庭の築山陰にひそんだが、父時国は深傷を負う。

勢至丸は、夜討の大將が庭で指図するありさまを見るや、すぐ手馴れた小弓で大將定明のひたいを射る。「定明が目のあひだにたちてけり。この疵（きず）かくれなくて、事あら

はれぬべかりければ、時国が親類の仇を報ぜんことをおそれて定明逐電（ちくでん）云々と勅修御伝は伝える。時国は苦しい息の下から勢至丸に、

汝さらに会稽（かいけい）の耻（はじ）を思ひ、敵人をうらむことなけれこれ偏に先世の宿業なり。もし遺恨をむすば、その仇、世々につぎがたかるべし。しかじ早く俗をのがれ家を出て、我菩提をとぶらひ、みづからの解説（げだつ）を求んにはといひて端座して、西にむかひ、合掌し仏を念じ眠るが如く息絶にけり（勅修御伝）

と遺言、四十三歳を一期として死亡。時国深手乍らも、仇討をとどめ、出家して後世をとむらえと遺言、正座・合掌し逝去されたことは誠に美事である。父の臨終の立派さは、勢至丸を感銘させたに相違ない。又時国もその遺言から見ると、信仰深い立派な文化人であった。暗夜乱闘中、九歳で敵将を射た勢至丸も稀な逸材である。

夜討をきいて集り来た一族の人々と漆間邸内を清掃し、時国公の葬儀戦死郎党等の供養を行い、悲しみの中にも、父の遺言をはやく実現いたしたいと、菩提寺の叔父観覚上人の室に行き仏道修行に入る。観覚は、もとは比叡山の学徒、南都へ移り、法相宗を学び得業となり、ひさしの得業と云われた学侶であった。

観覚が小児の器量を見るに「いかにも只人にはあらずとおぼいければ、いたづらに辺鄙の塵に混ぜんことをおしみて」教学を入念に教授する。

「勢至丸学問の性、ながるる水よりもすみやかにして、一を聞え十をさとする。きくところ憶持して、更に忘るることなし」とあるように、かくて七カ年をすぎ久安三年となる。勢至丸は叔父観覚と母を訪宅、比叡山修学の許しを受ける。

さて十五歳の春二月十五日、涅槃聖日、當時教界最高峰比叡山の西塔北谷源光上人の室

に入る。十八歳久安六年、西塔黒谷叡空上人室に移り「幼稚の昔より成人の今日に至るまで、父の遺言忘れがたくして隠遁の志深きよし」と伝える。叡空上人随喜し法然房源空と名を与える。黒谷は比叡山の別所、「閑静比なく、法恩蔵あり、日夜報恩蔵に入りて、一切経披閱五返、自他宗の章疏研尋せずといふことなし」と云うかくて承安五年四十三歳の春を迎う。その春とは彼岸の十九日と云う。

善導大師疏釈經散善義の「一心專念彌陀名号、行住坐臥不_レ問_ニ時節久近_一、念々不_レ捨者、是名_ニ正定之業_一、順_ニ彼仏願_一故」の文に至り、豁然として、阿弥陀如来の大慈悲救済、釈尊出世の本懐、凡夫往生の一門、茲にありと知見、日課称名六万遍の行者となり、浄土宗を開宗されたのである。

上人の九歳菩提寺修行から、四十三歳浄土宗開宗まで三十五カ年の仏道修行は、大聖釈

尊十二月八日の成道の年齢と期せずして三十五となる。一口に上人の修行三十五カ年とは云え、大変な苦勞の毎日であつたらう。一切経（大蔵經）八万四千の法門は凡夫往生でない、平等大悲の如来の本旨に添わない。如来の本旨、釈尊出世の本懐、いづくにありやと、上人の研究は日夜つづいた。

上人四十三歳春而も父時国逝去も四十三歳同じ春であることは、上人修行に當つて、父時国が、つねに上人の傍に在り、上人の身とその心を守護されたからではなからうか。かく見る時、父子の關係は一時的のものではない永遠不滅である。

現在も、我らがご先祖なり、父母は亡くなつてからも、我ら子供の身边に在つて、何時も身心をお守り下さるのである。靈魂は不滅であり、父子は同体同心とも見られる、念仏信仰の聖縁である。

ご先祖の供養をいたし、生きてゐる時は孝行することを、悦んでいただけるように心が

けなければならぬ。

御忌の頃の花の代表は各種の桜花であり、「花見」として生活を色どり意義深い。

われわれ人生は恒に吉凶一線上にある。花まつり、花見等は吉であり大幸で悦ばしい。しかし人生は無常、悦び中に無常の風がこないと限らない。又歩行中交通事故もあることを考えるとつねに念仏せよとの如来のみ教えは有難い。我々吉水末流としては、特に宗祖大師法然上人の最後にお示し下さったみ教えがある。時は建暦二年正月（三日）、法蓮房信空上人が、

古来の先徳皆遺跡あり。然るに今精舎一宇も建立なし。御入滅の後、いづくを以てか遺跡とすべきや

とお尋ねする。上人曰く、
跡を一廟に占むれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に徧満すべし。いかんとなれ

ば、念仏の興行は、愚老一期の勸化なり。されば、念仏を修せん所は、貴賤を論せず、海人漁人が苦屋（ときや）までも、皆是予が遺跡なるべし

とお示し下さる。

お念仏申す我は山里僻地なり共、遺跡なりとは何と有難いことではないか、

現代は時の流れに従って末法であるから御芳触の所を遺跡と定めて、教義と道場を研修して、一宗の発展を図らなければ、祖恩に応えがたい。

我ら吉水の末流は、後柏原天皇の聖旨を体し孟春一七日は、又各地寺院で同心を会して念仏の盛行をはかりたい。

又人生無常なれば、毎日その地で念仏会を開き、一人でよし、多数でよしと、念仏してご遺誠に添い如来の本願を人々に伝えたい。そうしてご安心を得て、良き毎日を送っていただきたい。

《世相評談》

内の目、外の目

—離婚も人生の再出発—



丹 に
羽 わ
演 えん
誠 じょう

(大分県佐賀関町正念寺住職)

します。

テレビで裁判所の法廷や調停の様、更に人生相談の場面が時折企画され、人間の悲劇や苦悩の実相が興味本意に放映されるのを見るにつけ、何かしら心のえぐられる感じがいた

午前九時半になると、家庭裁判所の調停が開始されます。調停室の廊下や控室には、数人の人が不安と疲れた姿で椅子によりかかっ

ています。十年前には、冷暖房の設備もなく殺風景なものでしたが、近頃は、よくなりました。

調停委員の二人が調停室に入ると、申立人と相手方が、入室して一応調停の趣旨、この場では内容は秘密であり、話合いの場であること、又決定したことは、判決と同じであることを説明し、申立人の方からお話を聞くこととなります。当初は、兩人とも、裁判所と云う何かしら裁かれると云う、堅い感じがしていますが、お話をしていますと大分落ちついてゆく様です。

「夫婦間の調整」の事件名です。離婚とかそんな名はついていません。十年もつばらこのテーマで調停して、この名は考えられたものと思います。すでに調査官が申出人の事情を聴いていますので予備知識として委員は略略は知っています。いよいよこれから事情聴取になるのです。

申立人のお話を聞いて、そのあと、相手方

の実状を聞きます。男性の場合、煙草を喫してよいと云うと、ぼつぼつと話をして下さいます。聞いていると、考え方、態度、この問題に対する意見が出て参ります。申立人の話と全然異なる場合もあり、又男性の場合、女性に関しては、余り話しません。

両者のお話を聞いていますと、全くその通りです。男の方に欠陥があるか、女性の方に問題があるか、二人で悩んだ、その結果、この調停となって来たのです。

従って、心の底から真剣に聞いてあげることにいたしています。仏心はどの人にもある筈です。そこに愛情と人間性があれば、何とかなるのです。それと法的にこうだから、こうだと過去の経験でもって判断をつけてはなりません。調停が回数を重ねてもよいと思っ

て聞きます。その後、調停の案を二人に出すという順次になるのです。

夫婦間の調整が出来れば、幸です。出来ない場合、如何とも仕方ありません。これもこ

縁です。和合の方へ、生活改善へすすめるのです。

人の秘密や苦悩を聞くのは、頭の痛い思いです。従って、兩人及び添人の意見を広く聞くことにいたしています。そうしないと、後日不服が残るのです。法的以前のものの心情を聞かないと解決はいたしませんし、そこに、人格的なふれあい、調停の意義があると思います。

十年も調停にたづさわっていても、一つの事件は、いつも新しい事件に思います。

離婚率が五十パーセントを超えています現在ですが、それにはそれなりの理由があるのでないかと思っています。価値感の相違、恋愛の問題、交際の期間、無理な結婚等、考えられますが、私が調停委員になった当初は、なるべく夫婦間の仲よくなる様に努力し、別居の期間を設けて、反省の時期を待ったものです。が、現在は、無理にその様なことはしなくなりました。結婚について、簡単に考える、深

く考えてない場合が多い様です。

女性の男性に対する理由は、仕事に専念しない、指導性がない、女性関係、ギャンブル好み等が数えられます。女性の場合、性格が強く女らしいやさしさが無い、家庭を大切にしない、虚栄心が高い、男性関係などです。以上考えて見ますと男性としては、家庭的なやさしい女性を好きであり、女性としては、指導力、生活力のある、家庭を考える男性を理想としている様です。

終戦後の女性の解放は、社会への進出となり職業婦人として生活の基礎を築いたので、自然、家庭に於いても、強くなったと思われます。それに反して、男子の方は、弱くなった観がいたします。例えば、親権者の問題になった折、以前は、子供を女性に托して、よい子に育てて下さいと云ったものですが、今は、あんな女に育てられては困る、私が育てると養育の条件が整わなくても、子を離さないので。そして困ると、施設に入れるケー

スがあるのです。何か決断のない淋しさを感
じます。

調停の回数を重ねるにつれて、両者との親
密さが出来、共に問題を考えて頂く心になる
のかも知れません。又調停室では、何かかた
くななことも、廊下の椅子に並んで、真実は、
どうなんですかと聞くと、すんなりとな
んですと話される場合も時にはあるのです。
心の世界は不思議です。

調停に弁護士が代理人として出席する場合
は、やはり法的に処置して参ります。不調の
場合は、本裁判への配慮が必要です。結局の
ところ、調停も、一般庶民の貧しい人々の相
談奉仕にあることを思います。

夫婦の間に心のゆとりをもつことが生活の
上に生きてくること、そして生活設計をもつ
ことです。調停を終って感じることは、いず
れにしろ、人生の再出発への希望をもつこと
を願って、心から念仏する気になります。

調停は日々複雑化して来ましたが、人の心

は変りません。

従って、テレビの調停の放映は、人の心を
害するものではないかと思えます。

× × ×

○家庭謹慎

少年非行の年齢の低下は、中学生にも及ん
で来ましたが、種々の問題を起しています。全
国的に校内暴力は少なくなったと発表してい
ますが、現実はその様ではないようです。

卒業前になると、学校を挙げて、その対策
に生徒主任を中心にして協議されている現況
です。全く一カ年の中学生の犯罪の総決算の
様です。

上級進学組、就職組と全く立場を異にして
います。然し楽しい中学校生活の卒業と新し
い人生への門出を祝ってあげたいと誰しもが
思い願うものであります。警察沙汰でもなけ

ればと、校長先生方も心配であります。

ある日、檀家にお参りに行きました。中学生がいるので聞いて見ると、家庭謹慎の様です。髪型の型から、想像もつきました。何かいたらぬことをして、先生が困っているのですよう。

「その髪型の型何と云うのかな」「知らない」「謹慎しているが、先生、毎日訪れて呉れる、」「日誌と、お話をして帰る」――。

テレビを見ながら、心落ちついていない。この家は、母子家庭、祖母と三人暮らし。本人が登校すると又、何が事件が起るので、今日の状況でありましょう。母親も仕事を休んで子に反省をと。然し考えて見ると、本人も母も謹慎とは、何をすべきか、前述した考えがなくただ家でおとなしくしていればよいと思っている程度。自分の行為は、中学生になれば、大体悪いことは知っている。ここに、大切な心の安定が問題となるのです。保戸島の暴力事件の鈴木研治上人のたった宗教家の立

場もここにあるのです。

そこで、「テレビもよいが、卒業まで、どの位まじめになれるか一つ考えて見ないか。本でもよまないか」と。本人は「本よんでよい」との返事。早速、吉川英治の人となり話を話して『三国誌』三巻を渡した。「はじめは面白くないが、だんだん面白くなるからな」と。そのうちに、母からも「本人も落つきました」、そして本人からも「明日から学校に行ける」と電話があつたのです。あとは本人の就職のみ……。

× × ×

「仏の本願を信じて念仏をすれば、必ず浄土に往生する。自分の罪の深さを考えて、往生の定、不定を思つてはならない。ただ信心の深いことによる」という法然上人の言葉に心うたれます。

み仏とともに

= 1 =

—うるわしのわが故郷—



やす い こう ざん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

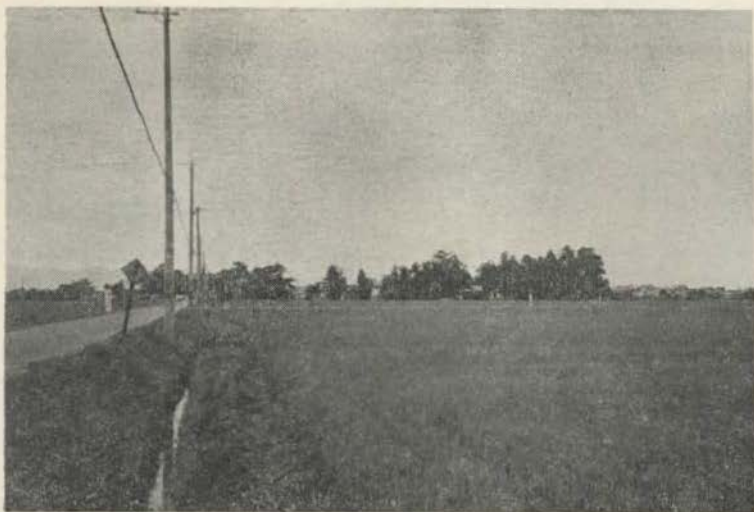
法然上人は御法語に、次のように申されている。

うけがたき人身じんしんをうけて、ありがたき本願にあひて、おこしがたき道心みちこころを發はして、はなれがたき、輪廻りんねの里をはなれて、生れがたき浄土に、往生せん事、悦びの中の悦びなり。

果して私のような者が、お念仏を申したからといって、浄土に往生させて頂けるかどうかは、疑わしいが、十歳の時より縁あって仏門に入り、今日まで、み仏の弟子の一人として、生かされて頂いているということは、有り難い極みである。まことに、「悦びの中の悦び」である。

しかし、私がうけがたい本願にあいえたことは、多くの人びとの仏縁のたまものであり、とりわけ信心深かった父母ちちうはの恩徳であったのである。すでに私の両親は、極楽の花のうてなの人となっているのであるが、その恩の深重なことを、有り難く思う今日この頃である。

誰しもその人生をふり返るとき、波瀾に富んでいることとに感嘆するものである。私の人生も、うたかたのごと



—村の遠望

(近江盆地) —

き浮生ではあるが、その迂余曲折に驚かされる。そして、よくぞここまでできたものと、われながら感心する。しかし、そうした曲折の人生も、決して私独りで歩いてきたのでなく、み仏に支えられてきたものであると、この頃、つくづく感ずるようになった。とくに二度の大手術を受け、人の命の何であるかを考えるようになった昨今、この私が生きているのは、み仏と共に生きてきたからであると、強く感ずるようになった。

私のいうみ仏には、本当のみ仏と共に、み仏の教えにより生かされてきたみ仏たちがいる。それは、私を守り、育ててきた有縁の人びとである。

私はいつの日か、み仏に支えられて生きてきた道のりと、その道のりを共に歩いてきた数々のみ仏たちのことを、報恩感謝の意味で、書いてみたいと考えていた。しかし、それはもっと先のことにしようとも思っていた。ところが、二度の大手術を受けてみると、何かせきたてられるようなものもあり、この機を逃すと、またとないようにも感ずるようになった。そして、勇気をだして、筆を取ることにした。

み仏や、み仏たちのことを書く中で、私の人生が見え



かくれするであらうが、それはみ仏たちのことを書いていく上で止むをえぬことであって、決してそれが目的ではない。あくまでも、み仏たちのことを書くための、私の影にすぎない。



私は、近江の国の百姓の二男坊として、この世にうけがたい人身をうけた。今では彦根市の一部になっているが、たんぼに囲まれ小村であることは、今も変ることがない。

伊吹、比叡、比良の連山に囲まれた近江盆地は、その六分の一を日本最大の湖である琵琶湖にとられてはいるが、肥沃な盆地平野を持っている。私の村は、その真中にあり、琵琶湖までは、歩いても十五分程である。四囲は美しい山々に囲まれ、盆地には川が幾条にも走っていて、風光明媚である。

とくに私の村は、たんぼを舟で廻るように耕地整理されていることもあって、山紫水明の地と言える。五月頃は、稲が緑のジュータンのように広がり、のどかなたち達の合唱が流れている。この辺りの村は、百軒から百五

十軒程の家が集落をなして、その囲りはたんぼである。そして、村の中はベニスのように運河があって、各家には農耕に用いる小舟がある。いかにも牧歌的である。子供の頃、この舟で川に遊んだこともあり、お盆には精霊流しをしたこともあった。残念ながら、今では、村の中の川は、埋め立てられて、自動車や耕耘機が、舟に替る時代となつてしまつた。子供時代の川がなつかしい。

村の入口には鎮守の森があり、大きな石の鳥居がある。そして、村の中央には、高い瓦屋根を聳えさせた寺がある。神社と寺は、村のシンボルでさへある。そうした小村が、広い田園の中に点在しているのである。

人は、この世に生を受けるのは、まことに宿世の縁というか、その地はまちまちである。ごみごみした街中に生れる人もあれば、かさかさの砂漠に生をうける人もある。そして、その生れ落ちた所が、故郷となる。その点、私の故郷は、まさに「ふるさと」というにふさわしいところである。この「うるわしのふるさと」に生をうけた私は、幸福者と有り難く思い、またこの故郷を誇りとしている。そして私は、このうるわしい故郷の地に、

大正十年七月二十四日、呱呱の声をあげた。

真夏に生まれ子は親不孝者であるといわれるが、私はすでに生れた時から親不孝者であつたことになる。しかし母は、お地藏さんの命日の朝であつたというので、

「この子は、お地藏さんの授け子でして」

とよく人に話していた。そして、お地藏さんの命日には、必ず村の地藏堂にお参りしていた。村の中には、幾つかの地藏堂があり、地藏盆には、この堂の前に数珠を組み、にぎやかにお祭りをした幼い時の思い出がある。いま時は、どのようにやっているか、知らないが、信仰深い村のことであるから、地藏盆もあい変らず盛んなことであらう。

祭と言えば、鎮守の祭が四月と九月にあり、特に四月はにぎやかであつた。村の中央の会議所から、鉦や太鼓を叩いて、長い行列をして、神社まで行くのであるが、一様に白の半纏はんてんに赤帯と赤はちまきのでたちは、子供の胸を跳らすに充分であつた。鎮守の森では、立派な御輿がかつぎ出されるのであるが、今ではこれがかつぐ若者が少なくなり、なかなか重い御輿は、かつぎ出せぬようになったと聞いている。祭も淋しくなつたようであ

る。

私はこの村には、十歳までしかいなかったが、その頃の思い出が、走馬燈のように脳裏を走っていく。小学校は、私の村になく、隣り村まで子供の足で三十分程歩いた。れんげ草や、菜の花の咲いている村の道を、ぞうりや下駄、時にはゴム靴で通ったのであるが、その村の道は、今はアスファルトになっているが、そのまま残っている。

冬などは三十センチから五十センチの雪が積り、青年団が雪かきをしてくれた道を、カバンを肩に斜めにかけて通ったものである。どじょうや、ふなをとって遊んだこともあった。いなごやたにしもとった。稲刈りの時、子供の仕事は落ち穂拾いであった。すでに月がで初めているのに、籠をさげて落ち穂を拾って歩いた思い出も、古い思い出となった。

そんな楽しい思い出の数々がある故郷で、私が十歳になったとき、驚天動地のできごとが、この村にやってきた。このうるわしの故郷から、私が京都の寺に行くといふできごとであった。

(つづく)

◇"浄土句集" 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主であられます 一田牛畝先生も大変にはりきっておられますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

。〒839―11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一田牛畝先生宛

。〒812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一田牛畝先生宛

。〒102 東京都千代田区飯田橋1―11―6

法然上人讃仰会



(読)(者)(の)(べ)(い)(じ)

合掌するころ



小野小町で有名な随山院の桜が微笑むように開いたのを見て、とても楽しく、嬉しく感じました。梅花でも桜花でも厳寒に耐えに耐えて、春には爛漫と美しい姿を見せてくれるので、大勢の人々が楽しむことが出来るのです。

藤村正雄

しかし、花は無言で散って往くのです。合掌。……春爛漫の季節になると、総本山知恩院では恒例の御忌大法要が営まれます。今年も待ち遠しい御忌大会が近づきましたので、大変うれしく思うのです。二月七日に、「知法発第一五〇号」で、寺本哲栄執事長から「御



忌大会中配役御依頼之件」の書簡が参りましたので、先祖に報告申し上げまして、大会中、日々、方丈の御奉仕が無事勤められますよう祈願いたしました。

陽春四月の好季に営まれるこの法会中、俗界を離れて無我・純粹の心で懸命に、仏道の御奉（貢獻）に精進させて戴く。それで身体が健康になる、反省する気持が強くなる、立腹する意趣がなくなる、悲しい宿命が幸運にかわる——とすれば、これに勝る幸福は他に一切ないと確信できます。言葉で表現できない素晴らしい仏道に出合つて戴び、御忌会に御奉仕（貢獻）させて戴くようになってから、苦しみも、辛いことも、悲しいことも、一切無くなり、家庭円満、店舗繁栄といえます。この現実には理屈でなく、正しくみ仏の慈悲でしよう。その慈悲に包まれていることは、体験者でないとは分りかねるでしょう。檀信徒の皆様、仏道の御奉仕（寄与）に精進なされるように心がけて下さい。乳児（一歳）から合掌を教

えるように饒めておけば、乳児でも必ず合掌するようになります。合掌を覚えた子供は、学生になっても暴力を振るような馬鹿なことは絶対しません。これは私の体験から申しているのです、確かなものです。

現代の母親の多くは子供に合掌を教えることを怠っているのです。感謝の心なくては、親の言うことも、先生の言うことも「キカナイ」のは当然でしょう。若いお母さん、今からでも遅くありません。お子様達に合掌するように教えて下さい。日々合掌さえしておれば、親や先生を泣かしたり、人と争うなどつまらない行動はしないようになります。これがみ仏の慈悲です。尊敬な合掌が身につけば、これほどありがたいことはありません。家庭に合掌の心があれば、不幸とも縁切れになります。このことを不思議がる必要ありません。合掌は、即ち信仰の力であります。ところで私にとりましては、総本山知恩院の御忌法要の奉仕が今回で十五回目になります。



す。それこそ肌で体験した実録です。だからこれほど確かなことは他にありません。理屈は無用です。

み仏の慈悲にすごることです。み仏は皆様の側にいつもおられます。その慈愛に包まれていれば必ず救って下さる。日々「南無阿弥陀仏」と唱えて合掌しておれば、苦しいことも、悲しいことも、なくなってしまう。つまり「南無阿弥陀仏」と唱えておれば、世に不幸な人間がなくなります。このことは理屈ではありませんが自然の法則と思ってもよろしいのです。

いわば念仏は、「因果の道理」であります。難かしいことを考える必要はありません。「ただ一向に念仏すべし」と、法然上人が教えておられます。「南無阿弥陀仏」と唱えて先祖に礼拝しましょう。

末娘(五女)が昨年十一月十八日に嫁ぎました。仏壇(御先祖)に朝夕給仕をしている嫁

である娘の姿が、婚家の両親の目に映り、今まで仏壇の給仕をしたことがなかったので、嫁の振る舞いに逆に教えられたということ。両親が仏壇の御先祖に、それこそ手を合わせて謝罪をなされたとか……、よい嫁をもらったと、姑が身内の方々に触れ歩かれたそうです。これは娘が当然のことをしているだけ。決して褒められるほどのことではないのです。わが家では並みのことであつても、家によつては、仏壇(先祖)の給仕が大変な事であると思ひ込んでいる向きもあるでしょう。自分たちは朝、昼、夕、三度のご飯を頂いているのに、み仏には御飯がいらぬ理由はありません。

人間で一番大切な合掌の躰を忘れていては、家庭が乱れるのも当然です。平穩無事に過ごせる為に、日々、朝夕、「南無阿弥陀仏」と唱えて合掌すればよいのです。

合掌

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（一）

— 北京から大同へ —



木の
下隆一

（随筆家）

佐藤密雄博士を団長とする「鎌倉高德院中国五大石窟の旅」というツアーに参加させて頂いたのは、去年の九月のことであった。

この三、四年、西域ブームで、NHKテレビの「シルクロード」を始め、テレビ各社のいろいろな番組で敦煌その他の風物がしきりに紹介されているが、その火付け役が井上靖氏の小説「敦煌」であ



——雲崗石窟の仏像——

ることは言うまでもない。だが、私の心に西域の灯をともしたのは、昭和二十五年の春、氏が芥川賞受賞第一作として「新潮」に発表した「漆胡樽」であった。この小説は、戦後初めて一般公開された正倉院の御物の一つ、漆胡樽にまつわる話で、西域から将来した酒か水を入れたと思われる、漆で塗り固めた皮製の樽が迎える数奇な運命を書いたものであるが、樽が運ばれて行く過程が、私には非常に新鮮に思えたのである。大学受験に失敗して、暗い春を送っていた時に（といっても、全く受験勉強なるものをしなかったのだから、当然の結果だったが）出会ったから、余計新鮮に感じたのかも知れない。その後次々と発表された氏のいわゆる西域物は、小説、詩、紀行など十数篇を数えるが、その一篇一篇に私の西域熱は煽られ続けた。昭和三十四年に出た、西域物の集大成とも言える「敦煌」に至って、私

の西域熱は頂点に達した。出来ることなら、敦煌の土を自分で踏みしめたい、ゴビと沙漠の違いをこの目で確かめたい——とは思ったものの、彼の地はあまりにも遠し、であった。

だから、今回の「五大石窟の旅」は渡りに船で、強引にお願いして連れて行って頂いたのである。俄然、彼の地は近くなった。

九月一日、成田を発って約三時間、十二時三十五分北京空港に到着。暑

い。日本製のマイクロバスで市内へ向かう。道路は整備されていて、両側をガードする二重三重の並木が美しい。そのまま真直ぐ故宮博物院（紫禁城）へ行く。出発前、一応一夜漬けて勉強はして来たが、実物を目の前にすると、そんな物は一発でふっとんでしまった。

とにかく大きいのである。連なる高さ十メートルの代赭色の城壁。そそり立つ赭金色の屋根を葺いた大廈高樓群、大理石の裝飾階段等々。洋の東西を問わず、権力者という者は途轍も無いことを考え、人をして途轍も無い物を造らせたりするものである。城の北側に聳える景山は、堀や池を掘った残土で築いた人工の山だという。さすが愚公山を動かすの故事を持つお国柄と感心してみたものの、よく考えてみれば、山でも造る以外土の捨て場が無かったのである。

睽目し嗟嘆す故宮秋日和

秋空へ颯揚がる天安門広場

広い天安門広場では、大勢の男たち（殆どが大人）が颯揚げを楽しんでた。優雅に二羽の白鳥を舞わせているのが珍しく、その絡線を知りたくて、しばらくカメラで追ってみたが、安物のカメラでは捉ええることが出来ず、いつの間にか空一面に拡がった鰐雲が、今年初めて私に秋を感じさせた。

北京を書くのが目的ではないから、この辺りで筆を擱くが、夜十時半、大同へ向けて北京駅を発つ。駅舎、プラットフォームともに薄暗し。

二日朝七時、大同着。快晴。かなりの高地のせいか涼気が身にしみる。工業と石炭の産地でもある大同の街は、駅前に露店や屋台が立ち並び、この時間すでに賑いを呈している。大同賓館に荷物を置き、朝食を認めた後、直ちに雲崗石窟へ向けて出発する。車種は違うが、この日のマイクロバスも日本製である。以後各地で乗ったマイクロバスは、すべて日本製であった。中国の自動車産業はこの種の車の生産にまで、まだ手が廻りかねているのかも知れない。

左右の山頂や高台にある烽火台の遺構を遠望しながら、川沿いの道を廻ること約三十分、雲崗石窟に着く。大変な人出である。門前の極端に首をかしげた一對の石彫の獅子の恰好がユーモラスで可愛い。ここで有名なのは、戦前から東洋史の教科書には必ず写真が掲載されていた露坐仏であるが、私が一番期待したのは、交脚の弥勒菩薩像に直面することであった。敦煌の交脚弥勒像は、これを讃嘆してやまなかった井上氏の詩で脚光を浴びたが、敦煌はいま大幅に立入り制限をしているということなので、ひょっとしたら見せてもらえないのではないかとという一抹の不安が私にはあった。井上氏の詩はご存知ない方もあろうかと思われるので、少し長いが全文を引いておく。

交脚弥勒

井上 靖

北魏という北方からやって来た民族の正体はよく判っていない。四世紀に国を樹てて、大同に都し、あの雲崗石窟を鑿っている。百年にして洛陽に遷都し、ここでは竜門石窟を営み、そして六世紀頃消している。本当に消えて跡形ないのだ。そうした北魏の形見を一つ選ぶとなると、それはおしゃれた交脚の弥勒さまということになる。脚を十字に交叉した殆ど信じられぬような近代的な姿態は、ふしぎに雷鳴、碧落、隕石、そんな天体に関するものを連想させる。星座にでも坐っているお姿かも知れぬ。当然なことながら、この弥勒さまはその民族と運命を共にし、星の如く飛んで、散乱し、また消えている。消えるほかはなかったのだ。だから日本にも伝って来ない。

年代はどちらが古いのか私には判らないが、ここで見ておけば見ておきたいと思った。窟から窟

へ、私は交脚の弥勒仏だけを探して歩いた。そして何体かの彫塑像（破損しているのもあったが）と、岩に彫られた夥しい数の弥勒像に巡り合った。巧緻なもの、稚拙なもの、いずれも私の期待に充分に応えてくれたのであった。それにしても、北魏の仏師や工人は何故こうも交脚像に拘ったのであろうか。後代の仏師・工人が全く顧みることがなかったのは何故か。北魏を樹てた民族の習慣に、例えば目上の者が目下に対する時、脚を交叉して坐するというようなことがあったとすれば、民族と共に消滅してもさして不思議はないのだが……。

雲崗でのもう一つの収獲は、ネクタイを締めた仏像（写真）を発見したことであった。チョッキ様の衣服もそうだが、なかなか粋なお姿である。果して、このネクタイのルーツはどこなのであろうか。ネクタイは洋服の服飾品という概念は改めなければならないのでは、と漠然と考えながら、私はその仏像の前に、しばし立ち尽したのであった。

雲崗の目玉は、何といっても写真でお馴染みの三体の露坐仏である。大勢の家族連れや若者が、露坐仏をバックに写真を撮り合っている。大方はボックス型の二眼レフだが、いまは珍しくなった蛇腹のカメラを構えている人も見かける。この露坐仏、端正なお姿を正面から拝するのもいいが、横顔の方が一層美しいと私は思う。私はこの露坐仏の横顔を、一瞬の雷光で是非拝してみたいものだと思う。そして、

露坐仏の横顔凛々し稲光

と、手帖にメモしたが、もし現実にもその場に遭遇したら、凄愴な絵に震え上ってしまうだろうと思わないでもなかった。

一巡して戻って来ると、現地の女性ガイドは何故か出発を急がしている。改めてもう一廻りしようと思ったが、断念してバスに乗る。一行の中にはプロカメラマンのS氏のように忿懣やる方ないとい

った顔をした人もいる。道が下りのせいもあるが、バスも幾分スピードアップしているように感じられ、石炭を満載した荷馬車を次々に追い抜いて行く。この帰り道、左側の切り立った砂岩の壁に彫りつけられた「佛」という文字を見つけた。いつ、誰が、どんな思いで彫ったものか。楷書の見事な文字であった。写真に撮れなかったのがいまま心残りである。

後で判ったことだが、バスを急がせたのには訳があった。昼食の予約時間が迫っていたのである。時間に遅れると、予約を取り消すというシステムになっているのかも知れない。華嚴飯店という目抜き通りにある店で、繁盛しているところを見ると一流の店なのであるが、どこでどう手順が狂ったのか、品数は豊富なのに、出て来る順番がまるででたらめで、とうとう華嚴飯店の美味を満喫するとは出来なかった。北京の天壇啤酒はサッポロビールに似た味がよかったが、大同の雲崗啤酒は薬草くさくて馴染めなかった。私がこんなことを書くのだから、つくづく食い物の恨みは怖いとはよく言ったものである。

外に出ると、日曜の午後ということもあって、路地は言うに及ばず、大通りも一杯の人混みである。自動車、自転車、荷馬車が、その人混みをかけ分けるようにして動いている。どこから現れたのかと、改めて人の多さに驚く。平日もこんなに人が出るのであろうか。女性の服装はカラフルで、人民服を着た若い女性など殆ど見られない。

午後は九竜壁というのと、上華嚴寺、下華嚴寺の見物が予定されているが、紙数が尽きたので、次回に譲ることにする。

日曜の街の喧噪秋高し

(続く)

● 現代詩コーナー……

四月の花

坂^{さか}
田^た
文^{ぶん}
三^{ぞう}

四月の空気は 清明
清く すがすがしく
明かるく 輝かしい

桜の花の 爛漫たる咲きほこり

七重八重の優雅高尚
色香もつややかに
若桜姥桜のにぎやかさ

花は桜

華麗なる咲きぶりは乱れ咲き
また散りぎわのいさぎよく
移り行くさまの速さも美しい

桜の花の下

典雅な心に身を託す
花盛りの明かるさに
私の心を清くする

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、**金二五〇〇円**というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

立ち止まるな善導

<10>

寺内大古

挿絵・松清達文

江南の残月 (一)



八十六歳の老帝は健康城の奥まった高樓、
淨居殿に幽閉されている。健康は現在の南京
である。全身はやつれはて、玉座に坐ってい
た数カ月前の英姿はさらにない。妃や皇子は
殺され、百余日の籠城戦を闘った将兵も戦死

か逃亡したかで、健康城内は反乱候景軍の制
服である碧色一色で埋め尽されていた。ただ
し籠城戦の末期、守備側の兵士たちは紅色の
軍袍の裏地を碧色で染めていたと言われるか
ら、反乱軍の突入と同時に軍衣を裏返しに着
直した者も多かったはずである。
望楼から見おろす街路には住民たちの屍体
が散乱し「臭気は数里に薰じ、爛汁は溝洫を



満たす」惨状であった。一代の栄華を誇った梁王朝も今は老いたる虜囚、この武帝一人きりになったのである。

しかし老帝の気力は、なお旺盛であった。

囚房にいて膝一つ崩さず、つねに北壁に面を向けて活眼を凝らしている。

「王よ、なぜ東方の窓へ眼をお向けにならないのですか」

毎朝、虜囚の様子をうかがいにくる反乱軍の首魁侯景はいつも同じ壁前に端坐する老帝をいぶかしく思った。

「東方なぞ見て、何になるか」

「日常、王が愛でられた華林園が一望のうちにおさめられます。王のお心を慰さめたいと願って、そちらへ窓をくり開けたのでございます」

侯景はいよいよ辞を低くする。

義のためではなかった。革命の業成って、老帝の甥を傀儡天子の座に就け自らは天柱將軍を号して兵政の権を一手に掌握した侯景だ

った。こんな廃帝なぞ足蹴にしたいところなのだが、面と向えばどうしても臣下の礼をとってしまふ。

権力者としての「格」の違いみたいなものであろうか。

「余名いくばくもないわが境遇で、庭園の花鳥なぞを眺めている暇があると思うか」

老帝は取奪者をにらみつけた。

「北方に何がございますか」

「すぐれた仏者、尊師たちがいた。彼らが蒔いた正しい仏法の種が、いま豊かに稔りつつある。その法(のり)の園から眼をそむけて、いまのわしにどんな生きかたがあるというのか」

侯景は大きくうなずきをくり返している。思えばまことに奇妙な光景と呼ばねばならぬ。

侯景はこの老帝を虜囚として幽閉しているのだ。直後にでも処刑できる実権を握っている。それが余命いくばくもない窮状を訴えら

れ、そこでの生きざまを諄々と説かれ、他人事のように納得しているのである。

ある日などは、この虜囚と支配者とが水入らずで酒を汲みかわしている。酔いのなかでお互いなつかしげに思い出を語り合った。

侯景は老帝の命令で北敵を鎮圧するために派遣された司令官だった。それが連戦連敗、命からがら長江の北岸へまで逃げ帰ってきた。このまま健康城へ復命したら、敗北の責めを追求されて武帝に首をハネられるかもしれない。窮余の一策で、長江北岸の城にいた武王の甥蕭正徳に「反乱」を持ちかけた。ところが現在の傀儡天子はまんまとこの話に乗ってきたのである。

健康城の防備は脆弱だった。屈強な皇子や將軍はすべて外征のため八方へ散っていた。まんまと虚をついて武力革命。

その経緯の細密を侯景は得々と語り、老帝また榮しげに耳を傾けているから奇妙である。

「景よ、一曲、舞え」

老帝は命じた。

「やりますか」

侯景もためらいなく応じて、新たな妃とした傀儡王の娘に琴を持ってこさせた。

舞いがおわると、老帝はよろよろと立ち上がり、ひとと侯景を抱きしめた。

「わしはお前が、したわしくてならない」と泣きむせんだ。

「陛下、この景が今あるのもすべて陛下のおかげでございます」

侯景も声をあげて泣いた。

「舞ってくれた礼に經典の講義をしてやる。どの經典がよいかな」

悲しいかな侯景には仏教の素養なぞまるでなかった。かたわらに在る若い妃に助けを求めねばならなかった。蕭正徳の娘は「法華經」の普門品、「觀音經」を誦した。老帝はいかにも榮しげにその一字一句を解説していた。

親愛と友好、いや君臣の折目までつけた酒宴。しかし侯景が翌日から老帝の監視をゆるめたわけではない。きびしく囚房に幽閉し続けた。

ところで老いたる武帝が囚房でつねに北壁に面座した「北に真の仏者、尊師あり」だが、これはかつて健康を訪れた達磨や曇鸞の両大師を指しているはずである。

後年の伝説は、梁武帝の仏教信仰を疑い、これら仏者との仲に水を差そうとする。例えば達磨大師が初めて江南の地へやってきたとき、武帝と面会しながらお互いに「共に語るに足らず」として別れてしまった、と伝える。

曇鸞大師の場合も江南を訪れた目的を「道教の仙経」を求めたとしている。それもあつただろうが、諸伝が書く会見時の大通年間（五二七—九）はお互いに五十歳を三、四年こえたころにあたる。曇鸞は不惑の浄土願生者になつていたはずだし、武帝また仏教天子の信仰を確立していたにちがいない。まして武

帝は襄陽の出身で若いときから浄土思想に目ざめていた。この点は後でふれる。

熟年の両者が浄土思想の花芯にふれて語り合ったであろうことは疑う余地がない。

達磨から禅を、曇鸞から西方浄土をさらに深く学んだ武帝が、彼らが生きた北方の地にこそ真の仏法が開花している、と信じたのは自然であろう。現に武帝は曇鸞の入寂を聞いたとき、

——梁国天子蕭王、恒向北礼曇鸞菩薩
と迦才の「浄土論」や「統高僧伝」が記しているのである。

蕭王は、武帝の名が蕭衍だったことによる。「恒（つね）ニ北へ向イテ曇鸞菩薩ヲ礼シ」たのである。

老境に迫り詰められた身を囚房に幽閉され、武帝は残り少い時間を仏法一点に絞って生き抜こうとした。

その太清三年（五四九）の五月二日、囚房の武帝は突然鉄格子の外に立つ獄卒に向かって叫

んだ。

「蜜を……蜜をくれ」

その意味が理解できず、獄卒がまごついて
いると、武帝は合掌したまま横ざまに倒れ、
絶息したという。

「武皇たちまちにして以て世を捨て給い、白
日は暗くして光りなし」と顔之推の有名な句
が後世に残されたが、悲惨とばかりは言いき
れまい。武帝臨終の眼界にはむしろ華やかな
光景がふくらんでいたのではあるまいか。「観
無量寿経」の世界である。

王舎城に幽閉された頻婆娑羅王は韋提希夫
人が身体に塗りこめた酥蜜を舐めて飢餓をし
のいた。いま武帝が「蜜を」と叫んだのは、
わが身をこの頻婆娑羅王になぞらえ「観経」
がえがく釈尊の救い、阿弥陀仏の慈悲を信じ
て疑わず、法悦のなかで絶息していった事実
を証（あ）かしているであろう。

またこの事実は、武帝と疊駕との邂逅が道
教の仙教入手を目的としたという伝説を裏返

す証固ともなり得る。

二

反乱軍の首魁侯景が武帝を幽閉しながらも
なお臣下の礼をとり続けたのには、それなり
の「義」があった。必ずしも王者の格差だけ
ではなかった。つまり侯景反乱の「名分」は
武帝君側の奸を除くにあったからである。一
種の義軍に飾り立てた。

その君側の奸とは、ここ三十年間にわたっ
て内政を取りしきってきた右衛將軍の朱异
（しゅい）を指している。

朱异は「寒人」の出身だったが、稀有の秀
才である。寒人とは貧賤の家を意味する。揚
州の小吏から榮進し、健康城の官省へはいっ
た。

武帝の治政五十年間の江南は平和で明け暮
れた。平和が継続すると官僚が政治を支配す
る。朱异はそのトップに立って実質上の権力

を握った。

名門貴族や將軍連中は國境の防衛を名目にみんな外周の鎮台へ述いやられた。しかも武帝は老境を深めるにつれて「溺仏」とまで非難を浴びたほど仏教信仰へのめりこんでしまった。

そんな梁王政の中空状態を、侯景は不満分子や功名心かられた裏切り者を糾合し、まんまと決ぐったのである。単純粗笨な軍事グーデターを成功させた。

朱异は健康城攻防戦のさなかに戦死する。しかし武帝親政をうたいあげた侯景も、武帝の死によってすぐ化けの皮を剥がされてしまう。三年後の春、揚子江を下ってきた西方鎮台將軍だった王僧弁軍と江上で戦い、大敗して船中で船頭の手で寝首を掻かれた。

侯景の首と腕は塩づめにされて健康城へ送られた。これを街頭にさらしたが、数刻も経たぬうちに持ち去られてしまった。侯景に恨みをいだく市民が健康には数限りなくいたの

である。

さて、この事件は善導が生まれた隋の大業九年（六一三）から六十余年も昔へさかのぼった話である。なぜこんな古い話を持ち出したのか。それは善導の出生、誕生の地などについて考えてみたいからである。

結論めいたものを先に提示しておこう。筆者には善導と南朝——梁武帝とが深くかわわっていたように思われてならないのである。六十余年の隔たり、しかも梁王朝は武帝で滅亡してしまつた。具体的にかかわった痕跡は残っていない。ただ血の中を、一代の崇仏帝が仏教へ寄せた熱烈な欣慕の情念が生ま生ましく回流していたのではあるまいか。とりわけ命終に臨んで武帝の臉に灼きついた「観無量寿経」の残光こそ善導の全生涯を照射しとおしたと言えるかもしれない。

「大唐西域求法高僧伝」は義浄三蔵（六三五—七一三）が現在のスマトラ島に滞留していた間に撰述して、帰朝した嗣聖十二年に則天武

后へ献じた求法僧六十余名の略伝である。求法僧とは、中国から沙漠を越え南海を渡ってインドへ向った僧たちの呼称である。

ちなみに嗣聖十二年(六九五)は善導が入寂して十四年後にあたる。このとき義浄は、貞国律師という求法僧と一緒に帰朝している。

「求法高僧伝」は貞国律師が出国する前の動静をかなり詳細に紹介する。帰路を同行したほどであるから伝聞によるものではなく、充分に正確な記載であると信じていい。

貞国律師は渡竺を前にして各地に先輩諸師を訪ねている。問法するためにである。その先輩諸師のなかに善導の名も出てくる。

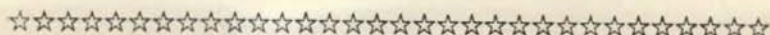
——襄州に往き善導禪師にあつて弥陀の勝行を受く。この時にあたり交索詞の穢土を棄てんことを望み、即ち安養の芳林におもむかんと欲す。

インドで經典を修学する前に浄土教の予備

知識を身につけるため襄州に善導を訪ねたのである。このあと貞国律師は唯識学などを問法して歩き、新たな疑念が生じたのであらう。再度善導を訪ねる。

——また襄州へ往き、和上の処に在って重ねて蘇咀羅を聴き、対法藏を披尋す。すこぶる蘊処に通じ、あまねく衣珠を檢し、化城に是れ息んで終に宝渚を期す。遂に乃ち足を襄水に濯ぎ廬山に願歩して上徳の清塵を仰ぎ、東林に住して志を散ず。師子洲に向つて仏牙を頂礼し諸聖迹を觀んと欲するの意あり。垂拱の歳を以て錫を桂林に移し、適化遊方して、ようやく清遠、峽谷にゆく。

さらに浄土学を善導のもとで研鑽したあと襄水で足を洗い、廬山へ出かけてゆく。そこは中国浄土教の鼻祖とも言ふべき慧遠が開いた靈山だった。もちろん慧遠が寂して四百年が過ぎ去っている。貞国律師はその迹を



「願歩」し、「上徳の清塵」を讃仰したのであった。そのあと桂林など各地で諸師に問法して南海へ旅立ったのである。

善導の入寂は永隆二年（六八一）の三月十四日である。貞国らの出発時にはすでに在世していない。貞国は善導を訪ねたあと廬山へ遊んだりして「垂拱の歳」（六八五）に桂林へ錫を移している。つまり善導の最終晩年に襄州で問法したことになる。

ただし、この善導を襄州の白馬寺にいた慧忠禪師門とする説もある。「白馬善導」と呼ばれ同名異人だとする。岩波書店昭和十七年版の「大唐西域求法高僧伝」も訳註者足立喜六氏がその説を採用している。これがナンセンスであることは後で触れる。

襄州——襄陽。揚子江は武漢の肥腹部で北方から流れこむ漢水を吸収する。この漢水を北上すると襄陽に達する。

襄陽から北へ向う道はやがて分岐し、右側のなだらかな道が洛陽へ、左は終南山にぶつ

かって山峽の道を縫ってゆくと長安の都が臨める。これらの道を選ばず、襄陽からそのまま西方を目ざせば蜀の国（四川省）成都へ通ずる。つまり襄陽は関中と蜀、さらに江南とは水路でつなぐ重要な接点であった。当然、古くから南北の物資はこの街で活発に交流した。「数州の粟を運んで儲倉を実たせり」と「梁書」にあるように物資の集散が円滑におこなわれてきた。

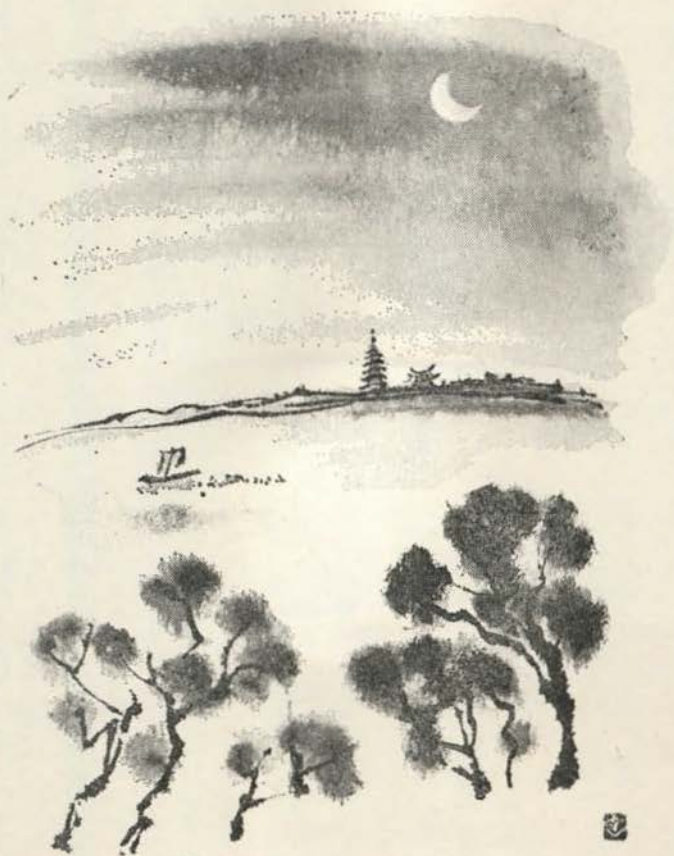
商都としてだけではない。南北の文化交流でもこの襄陽は大きな役割を果たした。とりわけ仏教は、西域から沙漠を経て長安、洛陽へと浸透してきたため、江南を指向するためには襄陽を拠点としなければならなかった。

四世紀の半ば、洛陽の南陸渾で精舎を結んでいた道安の教団は、戦乱を避けて襄陽へやってきた。四百余人の大世帯だったと言われる。そのなかに慧遠もいた。

道安は襄陽で白馬寺を建立し、それが手狭になったので襄陽城西北郊の亀山麓に檀溪

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

残
月



寺を造営した。溪谷添いに四百余の僧坊を持ち五重の塔を配した大結果だった。

慧遠は襄陽に二十年近くも滞留するが、やがて漢水を下り、江南へ錫を移してゆく。揚子江を見おろす名勝廬山にこもり、中国浄土教を確立した。その慧遠教団は白蓮社と呼ばれた。百二十三人の同志弟子たちと念仏実践を誓い、如何なる俗習にも馴染もうとはしなかった。

健康城の王桓玄が親しく廬山へ登ってきて、慧遠を宮廷の護持僧に招じようとしたが「沙門は王を礼せず」と迫り返している。

廬山慧遠の白蓮社は「蓮宗」とも呼ばれ、彼の死後も教団が継承された。どの蓮宗祖師系譜にも「慧遠―善導」と続く。わずかに「慧遠―曇鸞―善導」とする一書が残るだけである。

現代流に言う思想上の系譜としての「慧遠―善導」は理解でさるが、当時の面授や地縁を重んじた常識から考えて、江南の地とはわ

ずかな旅行ぐらいがあっただけで無縁にひたしい善導を、蓮宗が二祖とするのはどういうわけであろうか。

「大唐西域求法高僧伝」で貞国律師が襄陽に訪ねた善導を慧忠律師門の「白馬善導」として同名異人だとする説を前文で紹介したが、その説が「景德伝燈録」を論拠とすれば甚だしい誤りである。中国の禪宗、金陵牛頭山第六世の慧忠律師は弘道元年（六八三）潤州上元の生まれである。貞国律師が襄陽に善導を訪問したとき、「白馬善導」のその師僧すら未だ生まれてはいなかったのである。

ことのついでだが「景德伝燈録」巻四は慧忠律師門下として「白馬善導（道）」の名前だけは記すが、本文では全く筆を触れていない。

筆者は「大唐西域求法高僧伝」の善導を、以上の考察から光明寺善導その人と断定したい。どういう経路をたどったかは不明だが、晩年の善導は襄陽にいたのである。おそ

らくそこで入寂したのであろう。入寂後、遺骸ないし遺骨が長安南郊の香積寺へ運ばれた、と考えたい。

三

商都、仏都の襄陽。南北の接点である襄陽は、もう一つの機能を持っていた。軍事上の重要拠点でもあった。

漢水を北上すれば長安、洛陽へは容易に到達できる。もちろん逆に北方からも攻めこまれる。進攻と防禦の両機能を具備していたわけである。

南京の健康城を首都とした五世紀の齊王朝は、明帝が死んで(四九八)その子東昏侯が王位を継いだ。そのころ蕭衍(後の梁武帝)は襄陽にいた。北方の敵に備え、強大な守備軍を抱えた前線司令官だった。

永元二年(五〇〇)に中央で内乱が発生した。それを鎮圧する名目で蕭衍は大軍を襄陽

から進発させた。甲士万余、馬千余匹を軍船三千艘に乗せて漢水を下り、揚子江へはいった。腹背をつかれては困るので、まず揚子江の接点漢口の上流にある江陵の防衛長官を口説いて味方へ引き入れた。そして一気に船団を南下させたのである。

健康城の包囲攻防戦はいささか手間取った。戦調というよりも周城の諸城へ派遣されている齊の將軍たちを説得しなければならなかった。慎重な蕭衍はたっぷり時間をかけてこれらの「外濠」を埋め、丸裸に孤立した東昏侯を攻めたてた。鉦起から三年目の秋、健康城は陥落した。梁王朝がここに開幕し、蕭衍は武帝を号した。三十九歳だった。

治政五十年。武帝は仏教倫理を政治へ組みこんで江南に王道楽土を建設した。武帝の仏教色は当然のことながら若き日から駐留した仏都襄陽で染色したものであった。晩年は「溺仏天子」とまでかげ口を叩かれて、叛徒に足を掬われる結果を招いたが。

善導と梁の武帝とは六十年の隔たりがある。直接の關係は求め得べくもない。ただ襄陽に発して廬山、健康城の揚子江の川面をいろどった残月——それは慧遠、曇鸞、梁の武帝たちが放った浄土を憧憬した澄んだ眸の輝きであったか。そして晩年を襄陽で暮した善導の胸にもこの残月は宿つていたことであろう。

南朝梁王の残月は、襄陽の夜空にだけ浮かんでいたのではなかったのかもしれない。

——唐朝善導禪師。姓朱。泗州之人也。少出家。

と「往生西方浄土瑞刪伝」にある。

この善導伝（全文で二百数十字）は、唐の文諲と少康との共録、または道説の撰述とも言われるが、断定できないようである。

また宋の王古が書いた「新修往生伝」には、

——唐往生高僧善導、臨湍人也。幼投密州明勝法師出家。

とある。善導の生地が泗州（安徽省）と臨湍（山東省）とに別れている。

現代の日本の学究たちは、ほぼ臨湍説を支持しているようである。筆者はもちろん学究ではない。研究方法などで幾多の手落ちや資料不足も免かれない。また善導寂後千三百年を経過した今日、両説それぞれがキメ手となる物証が発見されると思えない。

結論を先に提示しておく。筆者は善導の出生地として泗州説を主張したい。理由は徐々に返べてゆく。

泗州は安徽省の水邑である。東西を淮河が、北からは泗水が流れこんでいる。南方は肝胎（ぐい）の沼沢群がひろがる。どちらを見渡しても水また水である。

泗水の流れは清く、ことに兩岸の堤をおおう樹林は妙爽だったようである。その粋を

伐材して「箏」(琴)を作ると音色が素晴らしいと言われた。(魏の東阿王が友へ送った書簡にある。)

善導が生まれた大業九年(六一三)のころ、その泗水も濁流と化していたことが想像される。大運河が完成していたはずである。

この大運河、隋の煬帝が起工している。大黄河の濁水を氾濫から守るためという目的だが、水利だけではなく煬帝は江南の文物を関中(長安、洛陽)へ運びこむ舟脚を求めたのであろう。

いや気宇宏大な煬帝は腹の底でさらに別なものを欲求していたにちがいない。気宇の宏大さは、この大運河完成の前に万里の長城に大修復を加えている。首都を洛陽から長安へ遷して、大聖城を構築した。丁男十万人を注ぎこんだ。と「隋書」は誌るす。それをこえた大工事がこの運河だった。完成すると煬帝は、竜頭の櫓船を新造させ、日夜酒宴を船上でくりひろげながら江南の旅を楽しんだ。煬帝の

欲求とはこの「船遊び」であらう。そして何度目かの江南の旅。終点とも言わべき楊州の城で家老の宇文化及に殺されてしまった。

さて、善導の生地をこの泗州とする推論の根拠だが、筆者はこれまで述べてきた善導と梁王武帝との見えない絆でつながれた関係、浄土思想の原景のなかでこれを主張したいのである。

主張する前に、なぜ臨淄であるのか。臨淄説の実体を紹介しておきたい。

王古の「新修往生伝」が何を土台にして臨淄とした不明なのである。王古は「瑞応刪伝」の作者に擬せられた少康たちよりも二百年ほど後の人である。しかも「幼くして密州明勝法師に投じて出家す」という文章も何が根拠であるのか、全く不明である。

常識では明勝法師は、吉祥大師吉蔵と並んで法朗門下の学匠ということになっっている。後年、長安へ出京した善導が、吉蔵の住した実際寺へはいったので、吉蔵、明勝の法

兄弟の縁が善導と交叉してくる。

ところが彼らの師である法朗は死ぬまで江南の南京を離れなかった人で、楊州にいた吉蔵は理解できても山東省の密州に明勝などという弟子がいた形跡は全く考えられないのである。かりに密州の明勝が実在だったとしてもその法師は法朗門ではなかったはずである。

臨淄は臨准の誤記という考え方も古くからあった。臨准は泗州の別称（時代によって呼称が変わった）なのである。また現代の臨淄説を主張する人は、臨淄を臨准と読み違えたともする。淄か准か。文字だけを追究していても結論は出てこない。

臨淄説の現代学究は、密州との距離感でものをいう。幼にして（七歳）密州へ出かけた善導である。安徽省の泗州からは遠距離すぎる。同じ山東省の臨淄こそ自然ではないかという。

しかしこの距離感は平面地図の上、ないし

は現代の交通機能で考えている。

たしかに地図上の直線距離では近い。だが密州と臨淄とは別国なのである。臨淄は「平盧」、密州は「秦寧」で藩鎮境界線が密州の北方にはっきりと引かれている。そればかりかその山上には長白山から延々とびた「齊ノ長城」が構築されていた。

話は少し古くなるが、「股くぐり」で有名な漢将韓信が山東半島の斉を攻めた。その首都臨淄を攻略したが、斉王の田広は長城を越えて密州へ逃げた。韓信はそれ以上追撃できなかったという記事が「史記」である。しかも善導幼少時の隋末から唐初へかけて山東は群盜反乱軍の巢であった。彼らの殆んどは長白山系にこもって征討軍をかわしている。七歳の少年がそんな危険な山道をたどって出家する寺へ赴くであろうか。

その点、泗州から密州へは地図で見た以上に近いのである。旅は容易だったのである。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 四月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十年三月二十五日 印刷
昭和六十年四月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
千〇三 振替東京八―八二―八七番

(新)

(刊)

南無阿弥陀仏

『極楽浄土を想い観る』

定価 一二〇〇円

〒二五〇円

浄土教聖典 観無量寿経を読む

著者

大正大学名誉教授・文庫

竹 中 信 常

父の殺害を企て母を牢獄に幽閉する非道の王子阿闍世^{アジャセ}。絶望と悲歎の底から救いを求める母草提希夫人^{イダイシ}。その壮絶な人間ドラマを背景に展開される極楽浄土とは……。悩み、悲しみ、迷う現代人に贈る阿弥陀如来の世界がここにある。

山手書房

〒112 東京都文京区後楽二―二―一〇松屋ビル

電話 〇三(八一五) 七四八六(代) 振替東京七―五四〇―一八

第五十一卷

四月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十年三月二十五日印刷 昭和六十年四月一日発行